

稱讃 二〇〇号

二〇一九年八月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

二〇一九年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

去る七月二十二日、熊本教区法雲寺第十五世坊守の深妙院釋芳蓮・加藤信子様 鹿児島・稱讃寺坊守の実母）が往生なされました。

七月二十五日十九時・お通夜、二十六日十時・火葬、十四時・門徒葬が執り行われました。お通夜のご法話で、十三年前にご往生なされた前任職様のお葬儀で、深川和尚様からの弔電の内容に触れました。

この度の往生をめでたく思います。」と言った内容でありました。

私などは、お浄土に生まれることは、ありがたく、よろこびであることは、聞かされてきたことではあっても、なかなか、おめでたい」とは口にするのが出来ません。

それも、近しい親しい人にこそ、淋しさや哀しさの方が増して、おめでたいことと思うことは、不謹慎にさえ思えます。

しかし、親鸞聖人は、確かに浄土に生まれ、仏さまに成られた」ということを素直に慶ばれたのであります。淋しさ哀しさの中にあっても、お浄土に生まれていかれたと味わわせていただけるご縁に遇わせて頂いているんだなあと思えるお葬儀でした。

めでたい」とは、素晴らしい」と感動を呼ぶ慶びの声なのではないでしょうか。



明教房ののぼられて候ふこと、
ありがたきことに候ふ。かたが
たの御ころざし、申しつくし
がたく候ふ。明法御房の往生の
こと、おどろきまうすべきには
らねども、かへすがへすうれし
く候ふ。鹿島・行方・奥郡、か
やうの往生ねがはせたまふひと
びとの、みな御よろこびにて
候ふ。またひらつかの入道殿の
御往生のときき候ふこそ、か
へすがへす申すにかぎりなくお
ぼえ候へ。めでたさ申しつくす
べくも候はず。おのおのみな往
生は一定とおぼしめすべし。

（親鸞聖人御消息二 七三七頁）

住職の兄 鹿児島・稱讃寺住職）の坊守の実母
熊本・法雲寺前坊守（加藤信子様）のお通夜

亡き人が迷っている と言う人は その人自身が 迷っている

亡くなった人が迷わないように」と、
ご自宅のお仏壇やお寺の本堂で
手を合わせる人がいます。
先人を偲ぶ心は大切ですが、
根拠もなく、亡き人が迷っている
と考えるのは、自分自身が
迷いの中にいるからです。
亡き人をご縁として、
今を生きる私が仏法を聞くなかに、
迷いを超える世界が開かれます。

盆踊り

築地本願寺 伝道掲示板
二〇一九年七月

私の町会では、毎年、盆踊り大会が行われていま
す。本来、宗教的行事であったのでしようが、今
や、町会活動の一環として、コミュニケーションの場
になつています。それはそれで大事なことで、最初
の大会から、そういう趣旨で行われていたのだろ
うと思います。私自身も割り切つて、主催者側と
して盆踊りを行っていることです（正直、準備が大
変ですが）。宗教的行事と言われるのは、お釈迦様



のお弟子である目連尊者が餓鬼道に堕ちていたお
母さんを、お釈迦様のアド바이スを受けて、懺悔す
るお坊さんに衣食などのお供えをすること、お
母さんが救われていく様子を見て、喜び踊ったこと
が「盆踊り」の起源だと一説では言われています。
が、これはどうも真意ではないようです。
しかし、そう言う話が世間に広まるということ
は、子どもが亡き親を思う純粋な気持ちに呼応し
ていたからでしょう。

本当に先人を偲んでいるの？

新盆（七月十三日・十五日・十六日）、旧盆（八
月十三日・十五日・十六日）のいずれかの三、四日
間、亡き人が帰ってくる日と言われます。どこから
帰ってくるかという点、あの世だと。あの世」
（冥界）のことで、迷いの世界であるはずが、迷いの
世界と言う認識がなく使っている）の外に、盆の入
りに、地獄の蓋が開いて、キュウリの馬に乗って、早
く帰ってきてください。送りには、ナスの牛に乗っ
て、お土産をいっぱい乗せて、地獄の蓋が閉まるま
でに帰ってください。という話を聞きますと、亡
き人は「地獄」に居ると決めつけています。この現実
の世界が真実であり、しあわせな世界であると決
めつけ、亡き人を冒瀆していることにも気づかず、
思いを寄せていると勘違いしているのです。

亡き人が迷わないようにお家に帰って来れるよう
にと「迎え火」を焚くそうです。

今はあまり聞かなくなったことですが、お葬儀
で、火葬に向かうコースと収骨してお家に帰るコー
スを変える風習がありました。迷つてお家に帰れな
いようにしたそうです。

生きている者の都合で、迷わずに帰ってきてくれ
とか、迷つてお家がわからないようにしているのだ
す。因みに、お茶碗にご飯を盛り付け、箸を一本
立てるのは、亡き人にもうあなたの食べるものはあ
りませんと、宣言することだそうです。

昔は、亡くなった人が使っていたお茶碗なんかも
割つたりしていました。一つの節目なのか、昔は食
べることが大変でしたから、一人でも食いぶちが減
つたことへの儀式なのかもしれません。亡くなった
方を尊ぶ気持ちが伝わりません。

幽霊について

七月二十六日が、幽霊の日だということを存じでしょうか。たまたまラジオでそのことを知り、何故、幽霊の日と言われるようになったのか調べてみました。

江戸時代、一八二五年七月二十六日(旧暦)に中村座で四代目鶴屋南北作の「東海道四谷怪談」が初上演されたことによるらしいです。

日本の幽霊というと、白装束を身につけ、白い三角巾をかぶり、両手を胸元辺りで垂らし、足がない姿をしています。

歌舞伎の演技で、尾上松緑が初めて足のない幽霊を演じたそうですが、十七世紀半ばには、足のない幽霊の絵が描かれていたそうです。

幽霊は、この世に未練や恨みがあつて、成仏できていないことを象徴しています。『オースト』という映画がありました。恋人の彼が亡くなり、彼女を守つてあげるお話ですが、姿・形がありませんから、最初は、彼女は分からないのですが、だんだんと彼がいつも傍に居てくれることに気づいていくのです。視ていて、とても愛情の素晴らしさを感じるものでした。

私たちは、亡くなつたら何も無い、死んだらおしまい」と思っている反面、愛する者には何か形あるものとして、その存在を期待しているのでしょう。幽霊もその一つであり、人の心模様が創り出したものであります。

幽霊に足がないとは、成仏できていない迷いの姿を表現していますが、その迷いは、幽霊を視る(想定する)人の心の模様を表わしているのであります。

迷っていることに気づかない

築地本願寺の七月の伝道掲示板に「亡き人が迷っている」と言う人は「その人自身が迷っている」とありました。先の幽霊も、視る人自身が迷っていることであります。

お盆で、先人のことを偲ぶことは大事なこともなのかもしれませんが、亡き人が可哀想だからとお坊さんに読経してもらわなさいといけなさいと思うことは、本当に亡き方を尊んでいることなのでしょう。仏さまに成つていられると言われているのに、亡霊のように思っていないでしょうか。そう思うのは、思う私こそが、迷っていること、そのことすら気づいていないことなのでしょう。現実のこの世界が唯一の真実であり、自分が思考することのみに頼っているのが、私たちなのだろうと思います。

『説孟蘭盆経』では、お釈迦様は、目連尊者のお母さんが餓鬼道に堕ちていたのは、生前、我が子・目連だけに優しく、他の人には冷たかったからだ。それだけを考えて、生前の行いが餓鬼道に

堕ちる報いを受けた因果応報」しか説いていないように思えますが、実は目連のお母さんは仏様に成つていて、あえて餓鬼道に堕ちて、お釈迦様の弟子だと自負する目連に、迷いの中で迷っている衆生の一人でしかないことを諭そうとされたのではないのでしょうか。自分がお母さんを救つてあげようと慢心の心でしかなかったことに

漸く気づいたところで、お母

餓鬼ども
餓鬼に
施す
孟蘭盆会

暁鳥 敏

さんは天に昇っていききました。天に昇る」の表現は、仏様に戻られたことを表し、目連の行為で、救われたというのではなく、目連が自分が迷っていたことに気づき、自分がお母さんを救つたのではなく、お母さんは、すでに仏様であつて、自分をこそ、救おうとはたらいっておられたことに気づかされたことを述べているのだと思います。

ご本願とは

浄土真宗では、この身が滅んだら、お浄土に生まれ、先人とまた相まみえることができる」という偈会「一処」のお話を聞きます。

また、お浄土に留まつているのではなく、仏さまと成つて、私の元へ還つてきておられる」という「還相」のお話を聞きます。

しかし、その教えは、自分の都合で聞くと、幽霊と何の変わりもありません。仏さまと言っても、世間で言う、霊魂と変わりがありません。

『正信偈』の中に、

還来生死輪轉家

決以疑情為所止

速入寂靜無為樂

必以信心為納入

(生死輪轉の家に還来することは、決するに疑情をもつて所止とす すみやかに寂靜無為の樂に入ることは、かならず信心をもつて納入とすといへり)とあります。

これは、私たちは、亡くなった方にも、亡くなる方にも、そして自分自身にも、どうしても自分の情（こころ）を込めてしまいがちになり、そのことで、その人の思いに応えていると満足しているのかもしれない。

亡くなった方の生前の人格、生業、思いを受けとる心情は大事なことと思いますが、その思いが反って、本来、仏さまに成っている方を、迷いの世界に還しているのかもしれない。

仏さまにするのは、生身のこの私ではなく、阿弥陀さまのご本願のはたらきでしか出来ないことがあります。

そのことを「必ず信心をもつて納入とする」とおっしゃっておることでもあります。

阿弥陀さまのご本願とは、この私が仏に成るという希望を叶えてくれることではなく、どの方もどんな状態でも必ず仏のいのちをいただく身であるという自然の道理（真理）のことでもあります。

その真理に気づかされることを「信心」と言うのだと思います。が、なかなか、その真理を信じることが出来ないのが、私であります。

そういう私であるからこそ、阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏」となつて、いろいろな方を介して、その真理を教えてください。

私たちは、愛おしいほど、感情に溺れてしまいます。愚愛はなはだ断ちがたしです。

お盆やお彼岸、年回法要をお迎えになる度に、あらためてお亡くなりになった方は、仏さまに成つておられ、いつもいつも、この私に「南無阿弥陀仏」と呼び続けてくださつておられると思つていただきたいと思ひます。仏さまとは私の思いを超えて、私を必ず救うと願つておられる方のことです。

拝読 浄土真宗のみ教え』に聞く

龍谷大学大学院教授

葛野 洋明氏

天乗』二〇一九年八月号より

お盆

亡くなられた先人たちのご恩に対し、あらためて思いを寄せるのがお盆である。

親鸞聖人は仰せになる。

願土にいたればすみやかに

無上涅槃を証してぞ

すなはち大悲をおこすなり

これを回向となづけたり

浄土へと往生した人は、如来の願力によつてすみやかにさとりをひらき、大いなる慈悲の心をおこす。迷いのこの世に還り来たり、私たちを真実の道へ導こうと常にはたらかれるのである。

仏の国に往き生まれていった懐かしい人たち。仏のはたらきとなつて、いつも私とともにあり、私をみまもつていてくださる。

このお盆を縁として、すでに仏となられた方々のご恩をよろこび念仏申すばかりである。

●懐かしい方を偲ぶなかに

お盆の季節になると、先に亡くなられた方々を偲ぶ、さまざまな行事や風景を目にします。

先に亡くなられた方を、日頃はあまり思ひ出すことがなくなつてしまつていても、このお盆の時期には、亡き方を思ひ出すことが多いのではないだろうか？

親しい方をお看取りした私たちにとって、その方との死別の悲しみは、誰にもわかつてもらえない思いなのかもしれません。お墓参りなどのお盆の風景がテレビで紹介されますと、悲しみを新たにされて「いました」というコメントが流れることがあります。

まさにその通りです。親しい方との死別の悲しみを、また新たに深く思うほかはありません。

しかし、阿弥陀如来のお救いを聞かせていただいている私たちは、ただ悲しみを新たにするだけではありません。懐かしい方を偲びつつも、必要な心配をすることはなく、安心の中に偲ぶことができます。

なぜなら、阿弥陀如来の救いは、この世に生まれ、生きて、いのちを終えていかなければならない者を、誰一人見捨てることなく、必ず救おうと願いを発され、あらゆるいのちある者に至り届いてくださっているからです。

● 阿弥陀如来の願い

阿弥陀如来の願いには、あらゆる者に、この救いを信ぜしめ、わが国・浄土に生まれさせて救おう」というおところが込められています。

これは、こうなってくれたらいいなあ」という、私たちが日頃思うような「願い」や「希望」などとは、全く違います。阿弥陀如来の願いは「誓願」とも呼ばれるように「誓い」です。

あらゆる者を、必ずわが国・浄土に生まれさせ救おう。この救いの法が完成しなければ、決して、さとりをひらかないと誓い、すでにさとりを開いて阿弥陀如来と成られたのです。

まだ死ぬことなど実体験していない私たちは、いのちを終えることを「死」としか思うほかはありません。しかし、阿弥陀如来は「必ず浄土に生まれさせてみせる」と誓われたのです。

この救いが至り届いたところには、もはや「死」は単なる「死」ではありません。死ぬことを「お浄土に生まれさせていただく」とことと思わせていただくことができるのです。

親鸞聖人は阿弥陀如来のこの誓いについて「ちかひのやうは、無上仏にならしめん」『註釈版聖典(632頁)』と示されて、あらゆるいのちある者を、この上ないさ

とりの仏に成らしめようと誓われている」と明らかにしてくださいました。

● 願土」と呼ばれる浄土

親鸞聖人は阿弥陀如来の浄土を「願土」と示され、この言葉に「弥陀の本誓悲願」の土なり」『同(581頁脚註)』と、詳しい解釈を付してくださいました。

阿弥陀如来の誓い・慈悲なる願いのとおりに、この上ないさとりの仏と成らしめる世界、それが浄土だとお示しくくださったのです。

しかも、懐かしい方々は、いのちを終えて、ただ浄土という世界に往っただけではないのです。

臨終 一念の夕、大般涅槃を超証す」『同(584頁)』と聖人が明らかにしてくださったように、この世のいのちを終えた時、阿弥陀如来の浄土に往生生まれさせていただき、それは同時に、この上ないさとりを開いて仏と成らせていただいたのだと、明らかに示してくださったのです。

懐かしい方、親しい方、今はいのちを終えられた方々を偲ぶ時、私たちは「死んだ」としか思いようがありません。しかし、阿弥陀如来の救いが至り届いているところには、浄土に往生生まれ、この上ない仏と成られた」と思わせていただくことができるのです。もう苦しみや悲しみ、悩

みにさいなまれ、迷い続けるいのちではありません。

この阿弥陀如来の本願が、至り届いてくださっていることを聞かせていただくと、先に亡くなられた方々、懐かしい方々を、もう心配する必要はありません。

懐かしい方を偲ぶ時、ただ悲しみに暮れるだけではありません。ああ、阿弥陀さまがいてくださってよかった」と安心の中に偲ぶことができるのです。

阿弥陀如来の本願は、先に亡くなられた方々だけに至り届いていたわけではありません。

今・ここで、悲しみの中の心に懐かしい方を偲んでいる、この私にも間違いなしに届いてくださっています。

宗門総合振興計画「懇志の」案内

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

稱讃寺のホームページが

新しくなりました。

鹿児島県の稱讃寺も紹介しております。
また、寺報「稱讃」を「部掲載している
だけですが、ご覧になってください。

shousanji.com

「聴聞のご案内」

真昌寺聞法会

日時 八月十一日 (金)
 一席目 一三 三〇 〇 一五 五〇
 二席目 一六 三〇 〇 一八 五〇
 講師 鶴田義光先生
 会場 ムーブ町屋四階会議室 B
 聴聞費 五百円

のんのん法話会・孟蘭盆会法要

日時 八月十六日 (金) 一四 〇〇
 会場 稱讃寺
 法話 住職

のんのん法話会

日時 九月十六日 (月) 一四 〇〇
 会場 稱讃寺
 法話 住職

平和フォーラム2019

日時 九月十七日 (火)
 会場 築地本願寺 本堂

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

日時 九月十八日 (水)
 会場 千鳥ヶ淵墓苑

秋季彼岸会法要

日時 九月二十二日 (土) 午後一時

日程

一三 〇〇 門徒総代会
 一四 〇〇 おつとめ
 一四 〇〇 法話
 一五 四〇 茶話会
 一六 三〇 恩徳讃

その他

八月二十六日 (月) 一四 〇〇
 のんのん法話会
 九月六日 (金) 一四 〇〇
 のんのん法話会
 九月二十六日 (木) 一四 〇〇
 のんのん法話会



「スッタニパータ」を読んでいます
 が、大乘仏教との関係がよく分かり
 ません。

「スッタニパータ」と聞くと、中村元先生の
 「陀のことば」を思い浮かべます。

「スッタニパータ」は、最初期に編纂された
 最古の仏典の一つとされます。パーリ語が主で
 ありますが、マガダ語の用語も含まれ、漢訳は
 一部存在しないそうです。現代では日本語とし
 て「南伝大蔵経」に収められています。

中村元先生によると、この経典は、仏教教団
 が大きくなる以前のもので、お釈迦様のお姿
 が、生き生きと、素直に描かれて、歴史的人物
 として表れていることです。

また、煩瑣な教理が説かれているのではな
 く、素直な人として歩む道が説かれているそう
 です。

大乘仏教が起る以前の原始仏教ではありません
 が、日本には大乘仏教と同時に伝わって来たこ
 とも、また説かれる平易な内容も合わり、民
 衆に向けた経典と思えるのです。執着する心
 を捨てる「慈しみ心を持つ」生きとし生け
 るものは、全て幸福であれ、安穩であれ」とか
 は、大乘仏教に通ずるものがあります。

しかし、この経典は、お釈迦様がいらっ
 しゃった正法の時代のことであります。私たち
 は末法に生きる者であることを踏まえて読むこ
 とが大事だと思います。

因みにYouTubeで 中村元 原始経典スッタ
 ニパータの解説「2時間30分」という中村
 元先生の生の講義を聴くことが出来ます。

六道輪廻―日常の私のこころ模様―

．．六趣というのは人間が生きている状況を段階的にいったもので、一番苦しい状況を地獄というふうにいっているわけで、その次は餓鬼、畜生、修羅、人間、天上と続いているんです。これは六道、あるいは六趣といいます。趣というのは一つ一つのありようを趣といいます。趣のわけですが、苦しい時というのは、これらが入り交じってしまつて秩序を失っているんですよ。だから餓鬼の苦しみが人間の上に来てしまつたり、それから畜生の苦しみが来てしまつたりとか、入り交じってしまつている状態なのです。

私は地獄のような苦しみをもっているんだけど、それはそれなりに地獄というところの趣に収まっています。餓鬼の苦しみももっています。しかしそれは餓鬼の苦しみのところに収まっています。というふうにしてそれぞれ苦しみがないことはあり得ないのだけれど、それらが一つの秩序性を持つて正されたときに全体を受けとめて私たちは生きていくことができます。

そういうふうな自分の苦しみの一つのありようを自分の内面の中で、こういう秩序でもって整え直すというためにどういうことが必要なのかといえ、一切行を現前する、つまり体験したいろんな思いをそこに出してみる。ちょうど、秋になると稲を刈つて脱穀というのをやるでしょう。ゴミはゴミ、粃として使えるものは使えるものということで、秩序が整っていくのと同じようにこの私たちが、一切行を現前する

ことを通すことによつて、今までこれが上になつたり下になつたりしていたことが、こういう一つの秩序性をもつて、そこに苦しみはあるけれどそれは苦しみのある場所で収まってい

く、諸趣が正されていくというようなかたちのバランスがとれていくのではないでしょう

か。実際に私たちの気持ちを考えてみると、年ここを瞬間瞬間に経巡っている。地獄のような思ひになつてしまうこともあります。だけれども、そういう苦しみの思ひのすべてを表現していくことによつて、こういう整いが少しでも出てくるのではないでしょう。それで苦しみがあ

りながらもなんとか人生を維持していくことのできる働きになつていくのだらうと思うわけ

です。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上なんていうとちよつと今の現代から離れたことのように思ふけれども、そうではないんです。この地獄の苦しみというの

はまさにありますよね。昨日もガンになつた方のお話がありました。きつ

とその時のお気持ちは、地獄に落ちたような思

いだつたのではないでしょう

か。餓鬼というのも、今本当に日本経済なんてま

さに餓鬼道でしょう。私どもの会社だつて一生

懸命、餌を拾ひみんな駆け歩いているのに、餌

なんて落ちていないんですよ。みんなで分ける

だけの利益なんてないから、いわば赤字を出し

てやっているなんて、餓鬼道の世界を苦しんで

いることですよ。畜生の世界なんていったら、

要するに飼われた生き物ということ、自主的に

生きることをできない苦しみなのです。管理

社会の中で生きている人たちは、畜生の苦しみ

を引き受けているのと同じですよ。ちゃんと餌

はくれるんだけど、自分の願ひのように生

かしてはくれないですね。だからいわば畜生と

同じことを今、現にやっているでしょう。

修羅というのは、競い合う世界。今みんな、

子供たちは受験受験で、そして社会に出ればま

た、利益を上げなきゃ上げなきゃで、あいつは

係長になつた、あるいは課長になつたとか、そ

ういうふうな競争社会。競争社会の苦しみは修

羅の苦しみです。だから昔も今も何にも変わ

ていないのです。

そして人間というレベルがある。面接に来た

人が ああ、やつと人心地がつかました」と言

われたことがありました。人心地がつくよう

な思ひでいられる状況が人間かもしれないで

すね。そして、こんなに幸せでいいのかな、と思

うほどの状況、天上のような思ひもないわけ

はありません。

しかし、それらはみな常に動いて、動いてこ

んなになつていくわけです。．．．

『びびきあう心』 大須賀発蔵氏著より

四天王の増長天について、カウンセラーであられ

た大須賀先生がご理解なされたことを一部抜粋させ

て頂きました。

傾聴の大切さを、もともと仏教は説いてきたこと

に気づかれたのであります。

私たちは日常の「四苦八苦」の動きにある程度耐

えられるのですが、どうにもならない時があ

る。それを話して受け止める場があることが大切

なのでしょう。

苦しみは成長の種」と言われます。仏さまが、

いつもあなたの苦しみを受けとっておられることに

気づかせていただくことかと思ひます。

稱讃寺 行事予定

二〇一九年八月の行事予定



四日 日曜礼拝 午前九時
六日 火のんのん法話会 午後二時
一日 日曜礼拝 午前九時
六日 金ののんのん法話会 午後二時
兼 孟蘭盆会法要
八日 日曜礼拝 午前九時
二五日 日曜礼拝 午前九時
二六日 月ののんのん法話会 午後二時
※ご家庭のお盆法要をお考えの方は、稱讃寺までご連絡ください。

寺報 稱讃』二〇〇号を迎えて

創刊号」を二〇〇三年一月に発行して、本年（二〇一九年）八月号で「二〇〇号」になりました。多少、発行が遅れたり、誤字脱字、記載漏れ、印刷間違い等、皆さまにご迷惑をお掛けしながらですが、途切れることなく続けてこれました。これも偏に、有縁の皆さまの御陰と感謝いたすところであります。

内容的に難しいとのお声も頂くのですが、私の至らぬ表現の不熟さ、何よりも私の理解度の薄さにあります。これからは、もっと皆さまに分かりやすくお話できるように精進して参りたいと思いますので、今後とも、お導き賜りますようお願い申し上げます。

寺報二〇〇号で、当寺が開設されてから十六年と八ヶ月が経ったことになりました。足立布教所に始まり、稱讃寺教会となり、ご本尊をお迎えし、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要をお迎えし、非法人寺院となり、今、門徒総代さんと相談しながら、出来るだけ早く宗教法人を取得できるよう、取り組んでいるところであります。皆さまの益々のご協力をお願い申し上げます。

ばん な ひと の
お盆 亡き人を偲び
かた っ
語り継ぐ

二〇一九年 心のとしび」八月カレンダーより

稱讃寺住職 北村信也

二〇一九年 八月 法務・布教・出向予定

三日 土	坂根家月忌参り 九時半
四日 日	福壽家 一周忌法要 三時
九日 金	春田家初盆法要 二四時
一〇日 土	大家家入仏・お盆 一時
二日 日	長田家初盆法要 二時
	島田家初盆法要 三時
二日 月	松清家初盆法要 一〇時
	山下家初盆法要 一時
	平澤家初盆法要 二四時
	鳥本家法要 二七時
三日 火	大村家初盆法要 一〇時
	蛭田家初盆法要 二四時
四日 水	千葉組了善寺盆参り法助
五日 木	千葉組了善寺孟蘭盆会法要
七日 土	桐生家初盆法要 一〇時
八日 日	千葉組了善寺法助 一時
二〇日 火	滝本家七回忌法要 一〇時
二五日 日	早田家 一周忌法要 三時
三二日 土	遠藤家 一周忌法要 二四時